

大学等名	亜細亜大学	レベル	リテラシーレベル
教育プログラム名	亜細亜大学MDASHリテラシープログラム	初回認定年度	令和3年度

取組概要

<1> 修了要件：全学共通科目「情報と社会Ⅰ」の単位取得

<2> 主要な到達目標：

- ① データ・AI活用領域の広がりを理解し、データ・AIを活用する価値を説明できる
- ② データの特徴を読み解き、起きている事象の背景や意味合いを理解できる
- ③ データ・AIを利活用する際に求められるモラルや倫理について理解できる
- ④ 個人情報保護法やEU一般データ保護規則など、データを取巻く国際的な動きを理解できる
- ⑤ 生成AI利用の利便性と危険性について理解できる

<3> 実 績：

履修者合計 2,991名

修了者合計 1,577名

プログラムの履修者数等の実績について

①プログラム開設年度 令和2 年度(和暦)

②履修者・修了者の実績(「学生数」「入学定員」「収容定員」は令和7年5月1日時点で記載)

学部・学科名称	学生数		入学 定員	収容 定員	令和7年度		令和6年度		令和5年度		令和4年度		令和3年度		令和2年度		履修者数 合計	修了者数 合計
		うち女性			履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数	履修者数	修了者数		
経営学部(社会科学)	2,379	1,010	555	2,185	533	428	478	335	135	10	30	16	52	8	126	0	1,354	797
経済学部(社会科学)	1,159	234	250	1,000	195	147	212	130	21	5	19	4	30	3	50	0	527	289
法学部(社会科学)	1,390	370	320	1,300	94	72	124	69	22	1	17	1	39	1	48	0	344	144
国際関係学部(その他)	1,195	633	260	1,060	137	77	194	116	10	2	13	1	22	0	31	0	407	196
都市創造学部(社会科学)※令和6年度募集停止	411	124	145	435	104	58	142	75	7	1	15	5	26	1	49	0	343	140
社会学部(社会科学)※令和7年度開設	157	75	145	145	16	11											16	11
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
																	0	0
合 計	6,691	2,446	1,675	6,125	1,079	793	1,150	725	195	19	94	27	169	13	304	0	2,991	1,577

認定期間中における成果と課題、今後の計画について

教育プログラムの改善、教育の質向上に資する取組・成果という観点から、可能な限り定量的なデータに基づく分析やこれまでの自己点検・評価結果を踏まえて、記載してください。

項目	具体的な取組の成果、課題
①プログラムの学修成果 (学生等が身に付けられる能力等)	・データ・AIによって、社会および日常生活が大きく変化していることを理解できる。 ・「数理/データサイエンス/AI」が、今後の社会における「読み/書き/そろばん」であることを理解できる。 ・データ・AI活用領域の広がりを理解し、データ・AIを活用する価値を説明できる ・データの特徴を読み解き、起きている事象の背景や意味合いを理解できる ・データの比較対象を正しく設定し、数字を比べることができる ・適切な可視化手法を選択し、他者にデータを説明できる ・スプレッドシート等を使って、小規模データ(数百件~数千件レベル)を集計・加工できる ・個人情報保護法やEU一般データ保護規則(GDPR)など、データを取り巻く国際的な動きを理解できる ・データ・AIを利活用する際に求められるモラルや倫理について理解できる ・データ駆動型社会における脅威(リスク)について理解できる ・生成AI利用の利便性と危険性について理解できる ・データ・AIが日常生活や社会組織でどのように使われているかを知り、モラル・倫理・リスク・脅威(リスク)の理解を深め、適切に利用することを意識して、知識・スキルの重要性を理解する ・個人のデータを守るために留意すべき事項を理解できる ・データを適切に利活用するためには、客観的な事実を確認した上で利用することが重要であることを理解する
②履修者数向上に向けた取組	・全学的な取り組みとして「21世紀亜細亜ベーシックス」の科目群にMDASH認定科目を含めており、学生たちの履修計画における指針を与えている ・授業形態を教室での対面型授業のクラスに加え、学生が在宅で毎週都合のよい時刻に何度でも受講可能なオンデマンドクラスを設置し、教室の収容定員や多クラス増設に伴う担当教員数の制約をなくしている ・オンデマンドクラスは、毎回の授業で課題レポートの提出を求め、対面クラスと同水準の成績評価を行っており、教育の質は確保されている 以上の取組みにより、様式2に示すように履修者数の向上に努めている。
③修了者数向上に向けた取組	・1科目のみの履修でMDASHリテラシーレベルを認定できるように授業計画を見直した(経緯:MDASHリテラシーを申請した令和3年度の修了要件は、先行していたデータサイエンス副専攻プログラムの修了要件と同水準とした。データサイエンス副専攻の修了要件は、その後令和4年度に開設されたMDASH応用基礎レベルに匹敵するものであったため、MDASHリテラシーのモデルカリキュラムを精査した結果、従前から開設されている「情報と社会Ⅰ」1科目によりリテラシーレベルは十分カバーできていることが判明し、学生の履修の負担を軽減することが修了者数向上に資すると判断した)
④関連する資格の取得推進に向けた取組	・G検定や統計検定などの基礎となる事項にも触れており、資格取得に向けた動機付けを促進している。(G検定の試験範囲は、技術分野と法律・倫理分野から成り、「情報と社会Ⅰ」の授業はG検定の試験範囲の専門用語をほぼカバーしている) ・「情報と社会Ⅰ」の計6回の授業では表計算ソフトを用い、統計検定3級程度の演習を実施している。授業は資格取得に直結するものではないが、こうした公的資格の過去問も授業の中で随時紹介し、学生の挑戦意欲を刺激している。
⑤修了者の進路、企業からの評価	本プログラム修了者は、特定業界に偏らず幅広い分野で受け入れられており、サービス業(21.2%)、情報通信(14.4%)、流通(13.6%)、商社(6.8%)、建設業(5.9%)、金融(5.9%)、メーカー(5.1%)など、多様な産業領域に進出している。データ活用やAIの基本知識を実務に結びつける力が、業種横断的に必要とされていることを示している。また、本学卒業生を積極的に採用している数社へのヒヤリング結果によれば、卒業生の職種は営業職、事務職等様々でありながら、それぞれの実務で「情報分析力」「論理的思考力」が発揮されているとの評価が寄せられており、各社のDX推進や業務効率化の場面での貢献が期待されている。今後の採用方針に「基礎的なIT知識と高い学習意欲を有する人材を積極的に評価し採用する」と示している企業もあり、本学のプログラムが、AI活用が前提となる社会環境に適応しうる人材の育成に寄与しているといえよう。
⑥プログラムの改善状況	近年における生成AIの急速な普及を踏まえて授業構成を見直した。以下のように、生成AIを活用し、仕上げる課題を課したり、生成AIと人間を比較し、それぞれの優れている点、劣る点を考えさせる等の課題を出題している。 ・AIやデータに関するニュース報道を授業の中で随時紹介し、AIが社会に与えるさまざまな影響を考える機会を与えている。 ・実践的なデータリテラシーを身につけさせるために、実際の、直近のデータを用いた演習を心がけている。 ・技術はどんどん陳腐化していくので、専門用語の理解よりも、本質的に何をやっているかを理解させるようにしている。たとえば、ニューラルネットワーク、GAN、大規模言語モデル、トランスフォーマー、自己注意機構などで説明に工夫をしている。
⑦再認定後のプログラムの目標・計画	社会の動向を常に注視しつつ、必要に応じてプログラム構成の改訂を進める。 ・MDASHリテラシーは、いわゆる耳学問では身につかず、自らやってみる体験により経験知を積むことが重要である。 ・生成AIの受け売りでレポートやプレゼンを行う学生が増えているが、AIの回答を自ら消化できているかどうかは一目瞭然であり、人間の「問う力」が今まで以上に必要となる。「問う力」はAIは持ちえない人間固有の力であり、AIやデータサイエンス以外の幅広い知識・教養(リベラルアーツ)が必要となる。 ・そこで、主体的な体験教育や「問う力」「考え抜く力」を養成することを目標としたい。 ・これらの目標はマインドセットの問題であり、学生の理解度や達成度を参考にしながら、授業計画を改訂していく。